

古河城跡(古河市)

築城年代:平安時代末期、築城者:下河辺行平

縄張図/明治末に開始された渡良瀬川改修事業の際に、主要部分は堤防や河川敷に変わった/堤防の市街地側には、観音寺曲輪の大半・桜町曲輪(「丸の内」と記されたエリア)の半分・百間堀等の水堀が残されたが、現在はこれらも宅地等になり、ほとんどの遺構は消滅している



ここは古河歴史博物館入口/出城である諏訪郭跡に建てられており、土塁と堀跡が残る/この池も堀跡で右手には土塁が見える



左手は古河歴史博物館下の「古河城出城諏訪曲輪跡」の碑





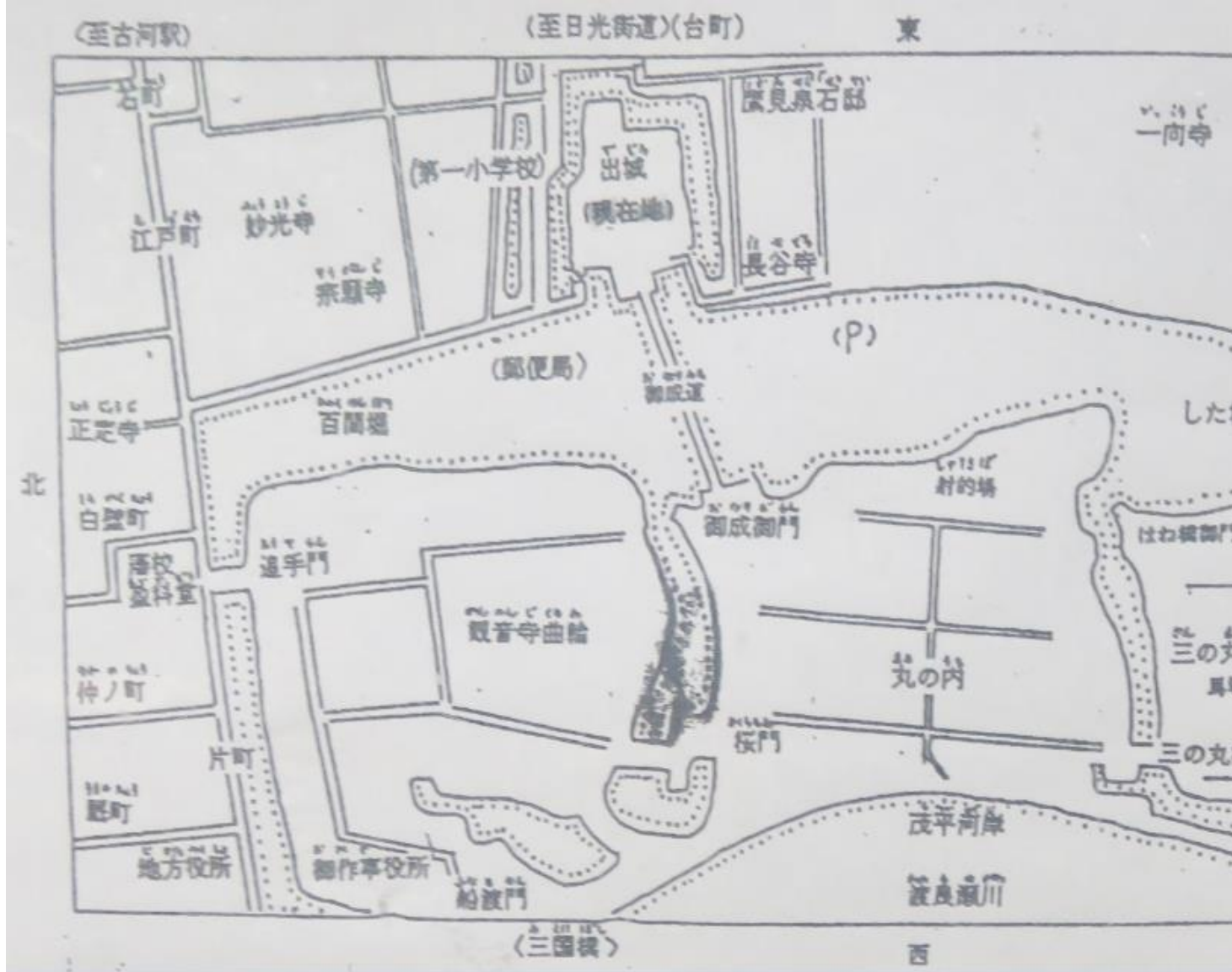
そこから堀跡を見たところ/左手が土塁



エントランスへ進むと土塁が取り巻いている



縄張図/出城(現在地)→御成道→桜門→追手門→船渡門→御作事役所→正定寺→鷹見泉石邸他の順に見てみよう



土塁の様子



左手を見たところ



更に土塁(右手)が続いている



塀の中を覗き込んでみると、こんな塩梅



左手を見ると下に堀跡が見える



そこに立っている「古河城出城諏訪郭」と記された標柱



堀跡へ下りてみる



土塁の状況も良く見える



堀跡と土塁は折れを伴いながら続いている



前方に進んで、振り返って見たところ



そこで左手を見たところ/前方に最初の古河歴史博物館入口が見える



これは反対方向から古河歴史博物館入口を見たところ/正面の木々の中にも土塁が残っているようだ



さて、ここは古河歴史博物館から御成道を通って西方向に進んで来た所で、丸ノ内(桜町曲輪)のエリア



そこに説明板が立っている



古河城 — 水底に沈んだ名城

古河城の起源は、平安・鎌倉期までさかのぼるとも、下河辺氏が築いた城館に
 はじまるともいわれるが、それを実証する記録は未だ発見されていない。享徳三年（
 日本史上、古河城が華々しく登場するのは、五世紀半ばのこと。享徳三年（
 四五四）、管領上杉憲忠を謀殺して、三〇年に及ぶ「享徳の乱」を開いた足利成氏
 以後、古河城は、五代、五〇年にわたる古河公方の拠点となる。こうして、歴
 史の表舞台へすがたをみせたのであった。
 江戸時代になると、古河城は、鎌倉を退き、古河に御座を構え「古河公方」を稱した。
 として整備されていく。殊に、城下町・日光道中の宿場町を包括する近世城郭
 城に拡張している。また、古河城は、江戸時代を通じて將軍の日光社参における
 御泊城の役割を担っており、公方の城として高い格式を有する数少ない城であつ
 めた。ちなみに、江戸時代の古河城主は、大老三名を筆頭に、老中などの要職を勤
 めた大名が多い。

中世から近世と、公方の城として関東有数の城であり続けた古河城であつたが、
 明治六年のいわゆる「廃城令」によって、土塁・堀を除く構造物・建造物のすべ
 てが解体されることになった。本丸・二ノ丸・三ノ丸等、かつての古河城中心部
 分の土塁と堀は、その後しばらく残存していたものの、明治四三年にはじまる渡
 良瀬川改修工事によって、そのすべてが破壊されている。古河城の遺構は、現在
 この「獅子ヶ崎」をはじめ、わずかに残されているに過ぎない。



「古河城本丸三階櫓・二ノ丸（左）」。明治3年 武蔵相模撮影
 （古河歴史博物館蔵）『古河城—水底に沈んだ名城』より



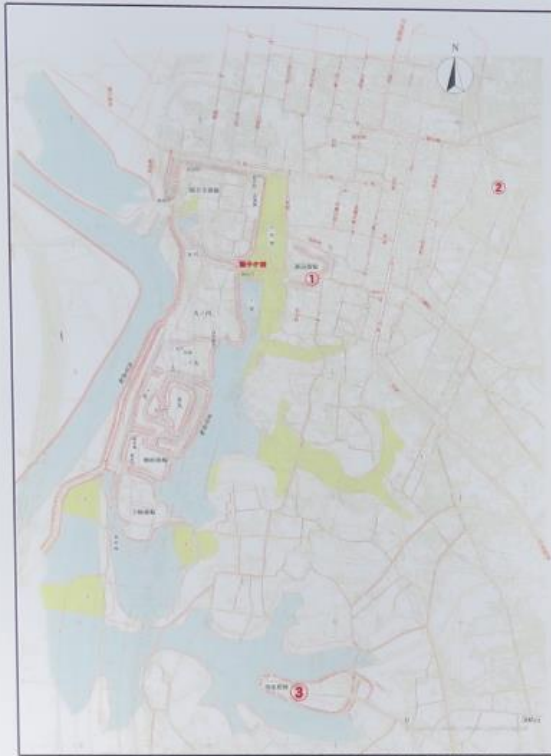
各務製版所「下野古河史図」



「古河城内外景観図」にある現在地



「古河城本丸三階櫓」。明治3年 武蔵相模撮影
 （古河歴史博物館蔵）『古河城—水底に沈んだ名城』より



古河城跡範囲推定図 推定復元・作成＝三井猛氏（『古河城跡分布調査報告書』より）

江戸時代における古河城の範囲を、測量調査の成果を一部ふまえて現代の地図に重
 ね合わせたもの（古河歴史博物館の位置に①を、古河聚の位置に②の文字を補った）。
 明治3年から大正11年頃までおこなわれた河川改修工事により、本丸・二ノ丸・三
 ノ丸という古河城の中心的な曲輪は、その土塁が崩されて堤外の河川敷および渡良瀬
 川河床となって失われた。なお、南に位置する「湯島館跡③」とは古河公方足利氏
 の「湯島館所」のこと。古河城と堀や沼沢地がつながっていたと考えられている。

古河城趾「獅子ケ崎」

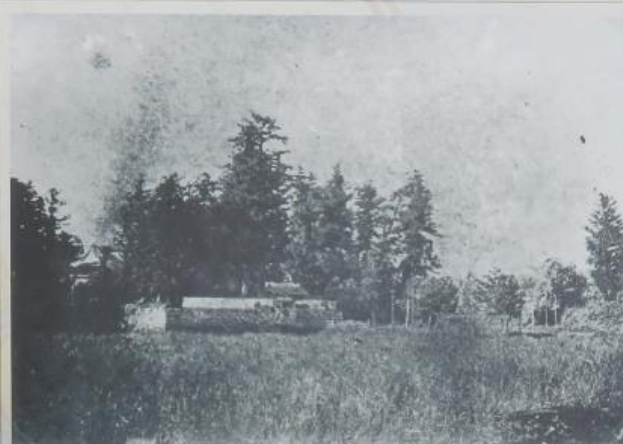
「獅子ケ崎」は、古河城の土塁の中で最も戦略的要地として重視されていた場所である。その地理的形狀は、曲輪の先端、尖った土塁が堀に突き出すというきわめて特徴的な構造で、周囲より高く築かれたその土塁は、南に隣接する「御成門」と「御成道」のほか、古河城全体を見通して有事に備えることのできる場所であった。

江戸中期の文人で、思川のお手伝い普請のため古河滞在中であった藤堂元甫は、獅子ケ崎を「御成門の北の側に土居の出崎ありて猪ケ崎(しがさき)といふ。実も猪の鼻の形に似たり。其地高くして諏訪曲輪、御成門、桜門眼下に見ゆ。猪ケ崎を以て此城を名城とすといへり」と評している。すなわち、「猪ケ崎(獅子ケ崎)」は、古河城御成門と桜門の双方を眼下に警備することの可能な要害で、古河城が名城たる所以は、その存在ゆえであると。また一説に、この高台に大砲を据えたともいい、この地の重要性をかいま見ることができであろう。

ちなみに「御成門」は、日光社参で古河城に宿泊した二代將軍徳川秀忠を迎えるため、ときの城主であった永井直勝が造営した門である。以後、三代將軍家光、四代家綱、八代吉宗、十代家治、十二代家慶という將軍が、この場所を通過して古河城に御成となった。通常、近隣に石の産地を持たない城に石垣は存在しないが、古河城にあっては將軍の御殿があった本丸入口と將軍通行の御成門にのみ石垣が用いられている。

さて、昭和50年代の道路敷設で先端の「鼻」部分が切り崩されたものの、史跡保存を強く意識された関係各位の見識によって、数少ない古河城の遺構として保存されてきた「獅子ケ崎」は、古河市民共有の歴史遺産とされるよう古河市に寄付された。

古河城を名城たらしめた「獅子ケ崎」。現在、古河城の面影を伝える数少ない史跡として守り伝えていかねばならない。



長谷観音より見たる御成門（明治3年 武藤松庵 撮影）
御成門の石垣・高麗門・櫓門がみえる。御成門を南東の方向から撮影したものである。



六軒町より見たる御成門（明治3年 武藤松庵 撮影）
御成門を構成する石垣の桁形と高麗門、櫓門の一部がみえる。御成門の右脇に突き出す土塁が獅子ケ崎。



獅子ケ崎跡遺構実測図（測量・作成＝三井住友）

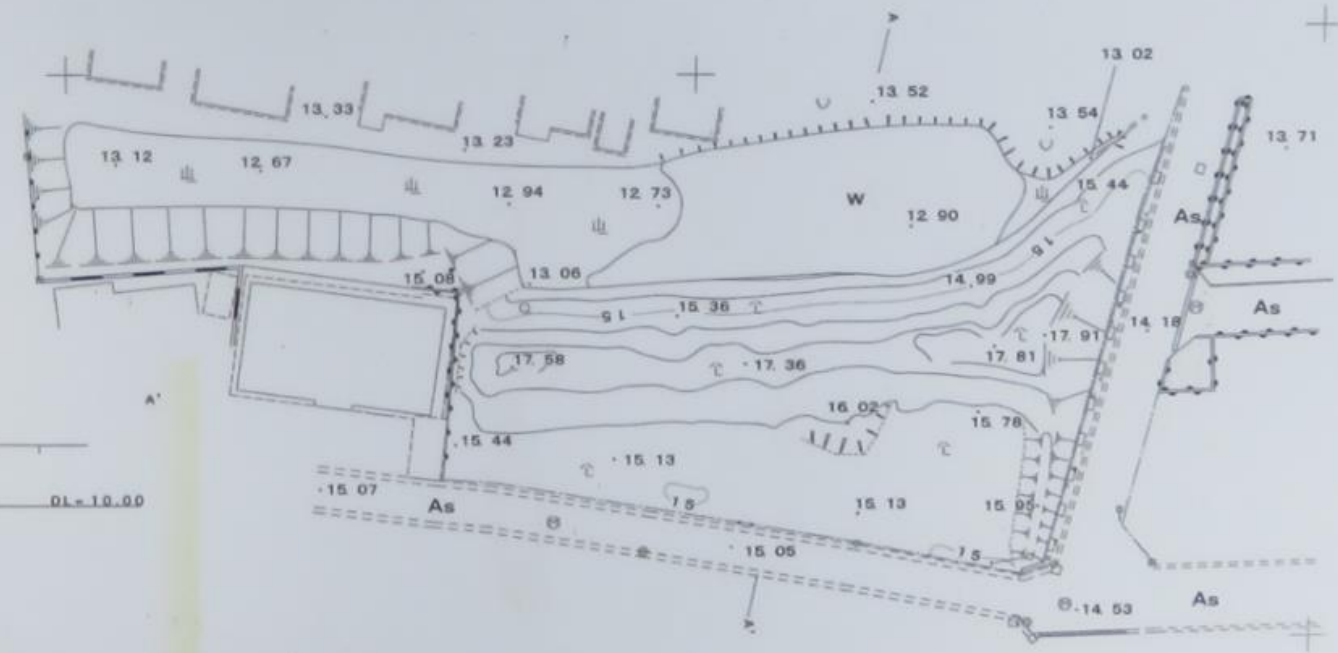


左＝観音寺より獅子ケ崎を望む
（『獅崎園写真帖』より）
右上＝御成道の上から、御成門と獅子ケ崎を望む
（『渡辺武夫古河城研究資料』より）
右下＝切り崩される前の獅子ケ崎
（昭和43年頃「渡辺武夫古河城研究資料」より）



左上＝切り崩される直前の獅子ケ崎
左下＝切り崩された直後の獅子ケ崎
右上＝同上
右下＝破壊された御成門の位置から切り崩された獅子ケ崎をみる
（いずれも 昭和51年頃 「渡辺武夫古河城研究資料」より）

獅子ヶ崎跡遺構実測図（測量・作成＝三井猛氏）



凡 例

線の形状	線種
等高線 (補助曲線0.5m間隔)	———





「古河城内外惣絵図」にみる現在地

これが獅子ヶ崎跡の土塁



左手を見ると、民家で寸断されている



裏側に回って見たところ



右手を見たところ/ここは堀跡でその右手が観音寺曲輪跡



前方で振り返って見たところ



土塁をアップで見たところ



これは獅子ヶ崎跡の土塁の対面にある古河藩家老長屋門



別の角度から



そこから更に西方向に進むと、正面に「古河城桜門址」の碑が立っている



こんな塩梅



別の角度から



さて、ここには「古河城追手門址」の碑と説明板が立っている



こな塩梅



古河城追手門跡

城の大手（正面）にあたり、敵の正面に攻めかかる軍勢（追手）を配置することから、城の正門（表門）のことを大手門とか追手門と呼んだ。

当該地の北に位置する東西方向の大通りを境に、北側は武家屋敷となっていて（片町）、南側は城の堀と五間（約九メートル）ほどの高さの土塁が構築されており、追手門に入るには堀にかかる橋を渡った。堀の水深は二尺（約六〇センチ）、堀幅は七間（約一三メートル）とも一六間（約三〇メートル）ともいう。

門は第一・第二門からなり、その間に枡形（正方形）の空間をもうけた形態であった。まず切妻屋根に、おそらく竪棧張りであったかと思われる扉をもった高麗門（第一の門）を入ると、そこは土塁で囲まれた枡形の空間で、右手にいかにも城門らしく豪壮な造りの第二門があった。その第二の門は櫓門と呼ばれるもので、土塁と土塁の間に渡櫓を渡して、下を門とし上を櫓（矢倉）とする形式であった。

門の創建は、慶長年間（一五九六～一六一五）の松平（戸田）康長のときであったという。

平成十九年一月

古河市教育委員会

別の角度から



こちらは「川口信任屋敷跡」のエリア



説明坂が立っている



解剖学者 河口信任屋敷跡

歴代、古河藩土井家の御側医を勤めていた河口家屋敷跡。河口信任を筆頭に、杉田玄白最晩年の弟子として江戸蘭学界に留学、古河で最初の種痘をおこなった信順（一七九三～一八六九、号〓祐卿・陶齋）や、東京大学医学部の前身である「医学館」教授を任命された信寛（一八二九～一九〇六、号〓杏齋・枕河）など、日本医学史上の逸材を輩出した屋敷といえよう。

とりわけ、信任（一七三六～一八一、号〓閑春・宏齋、字〓道五）は、明和七年（一七七〇）、京都において、日本最初の脳・眼球・頭部の腑分けをおこなった解剖学者として、**署名**。二年後、信任は、みずからの解剖所見に、二十三図にも及ぶ解剖図を付した『**解屍篇**』を刊行している。医者が手ずから執刀する解剖は、信任のそれよりも早いものが知られていない。日本における近代医学濫觴の一史跡といってもよいのではなからうか。菩提寺は**本成寺**。

平成十六年三月

古河市教育委員会

こちらには「古河城船渡門址」の碑が立っている



こんな塩梅



こちらには「古河藩作事役所址」の碑が立っている



こんな塩梅



その近くに鳥居が立っている



神額に「水神宮」とある



その北側に回ると、左手に「頼政神社」と記された標柱が立っている/右手の木々の所がそうらしい



社殿は観音寺曲輪跡に僅かに残るこの土塁上に建っているらしい



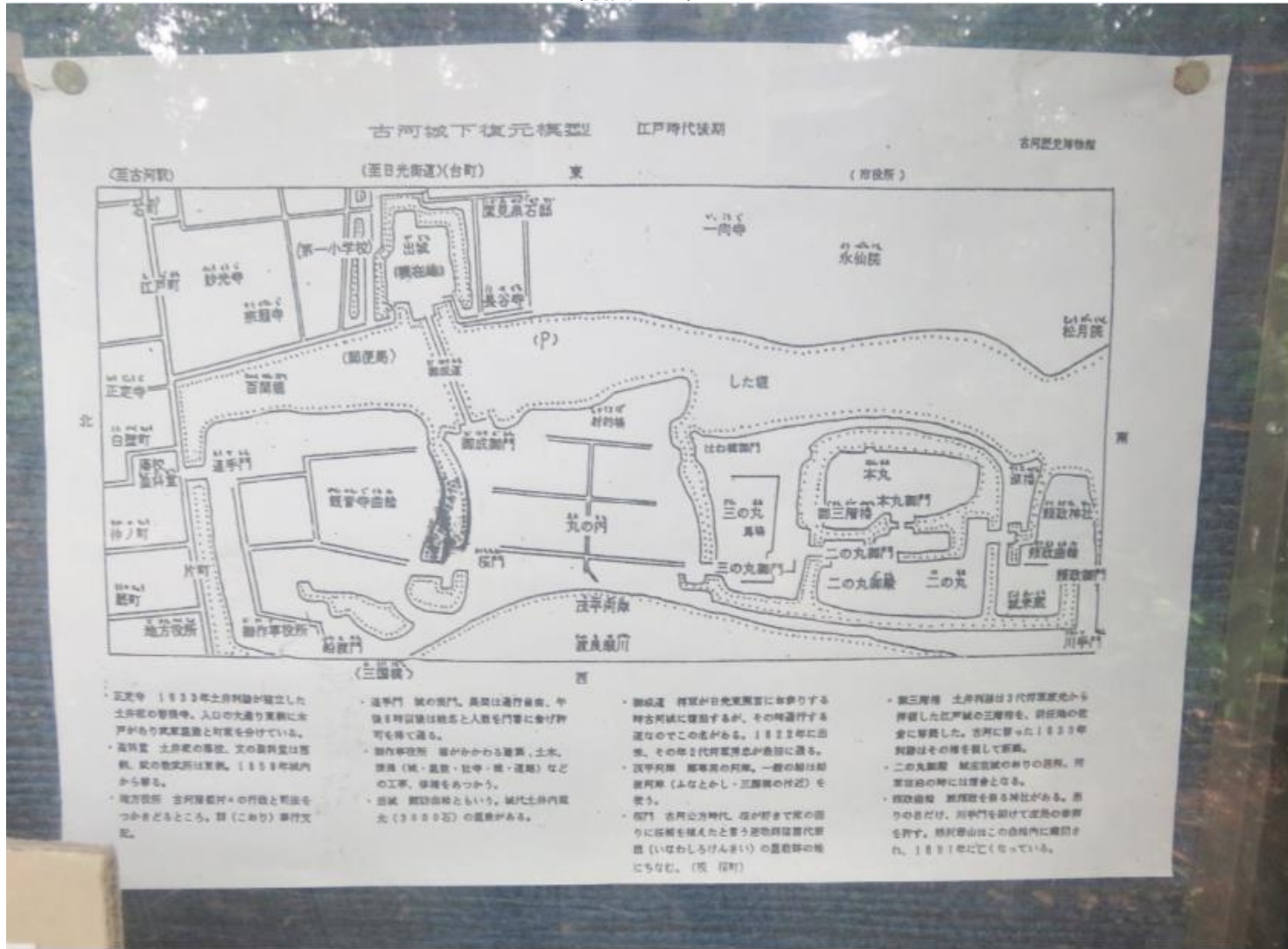
階段を登る途中に説明坂が立っていた



頼政神社は渡良瀬川改修工事の際、南にある立崎(頼政曲輪)から観音寺曲輪西北部の土塁上に移設されたものと云う



縄張図もあった



正光寺 1833年土井判官が建立した土井家の菩提寺。入口の大通り東側に土井があり武家墓園と町家を分けている。

高野堂 土井家の菩提。文の裏判官は菩提。史の惣次所は菩提。1858年城内から移る。

地方役所 古河藩蔵付の門衛と町家を分ける場所。詳(こもり)奉行文記。

通手門 城の東門。奥には通手自衛。午後5時以後は徒歩と人馬を門番にかけ許可を得て通る。

御内事役所 藩がつかかかわる建築。土井、旗本(城・幕府・社寺・城・通商)などの工事。修繕をまつかう。

出城 御出陣所ともいう。城代土井内蔵光(1800石)の居館がある。

御成道 将軍が日光東照宮に参りする時古河城に逗留するが、その時通行する道なのでこの名がある。1822年に出来。その年2代府家徳忠が参道に参る。

江戸内陣 御参りの内陣。一般の参道は御成道(ふたとかし・三層櫓の付道)を参る。

四門 古河の江戸時代。在が経て東の通りに延焼を感えたと言う徳川御代家徳(いねわしるげんまい)の遺教録の地にちなむ。(現 沼町)

三層櫓 土井判官は2代府家徳光から拝観した江戸城の三層櫓を、前陣の徳忠に奉賛した。志列に参った1833年判官はその櫓を築して新築。

二の丸御殿 徳川家徳の参りの居館。府家徳の時に仕置舎となる。

御成道 御成道参る神社がある。参りの目だけ、河津門を参って成道の参道を行す。徳川家徳はこの参道内に参道がれ。1831年に亡くしている。

ここが土塁の頂部



右手が頼政神社社殿、左手は先程の水神宮の社殿



さて、左手は永井寺の参道



永井寺本堂



立派な本堂である



さて、前方が正定寺



江戸幕府大老・土井利勝が開基がしたと云う



「大老土井大炊頭利勝墓所」と記されている



こちらには「絵画絹本着色土井利勝肖像画」と記された標柱と説明版が立っている



その他に、旧土井家江戸下屋敷表門である黒門、土井家墓所は古河市指定文化財となっている



本堂



境内にある「土井利勝公御像」



こちらは「侍従縦碑(土井利勝公御代記)」



鐘楼



さて、これが旧土井家江戸下屋敷表門である黒門



標柱には「建造物 正定寺黒門」と刻まれている



古河市指定文化財・建造物

旧土井家江戸下屋敷表門

(正定寺黒門)

昭和四十三年四月一日指定
古河市大手町七番一号

この門はもと東京の本郷にあった旧古河藩主土井家の下屋敷の表門であったが、昭和八年（一九三三）に土井家の菩提寺である当正定寺に移築・寄進されたものである。

江戸時代の大名屋敷に多く用いられた薬医門と呼ばれる型式で、両側に袖塀が付き、向かって左側に潜戸がある。また、屋根瓦には、土井家の家紋である「水車」があしらわれている。

平成二十年一月

古河市教育委員会

側面から見たところ



境内側から見たところ



ここは市内にある恵比寿神社



ここがその近くに所在する福法寺/山門は、古河城の二の丸御殿の乾門が移築されたものらしい



「建造物 福法寺山門」と刻まれた標柱が立っている



古河市指定文化財・建造物

旧古河城乾門

昭和四十三年四月一日指定
古河市中心町三丁目九番八号

この門は江戸時代の旧古河城内の二の丸御殿の入り口にあつて、乾門と呼ばれた門である。これを明治六年（一八七三）の古河城取り壊しの際、福法寺の檀家が払い下げを受けて同寺に寄進・移築した。

この門の構造は平唐門と呼ばれる型式で、両側には袖塀が付き、向かつて右側に潜戸がある。かつての古河城の姿を現在に伝える数少ない遺構として貴重である。

平成二十年一月

古河市教育委員会

境内側から見たところ



柱足元のヒンジを見たところ



市内の坂長には、城内の文庫蔵・乾蔵を移築したと伝わる建造物(国の登録有形文化財)が残ると云うが、前方に標柱が見える



「古河城御茶屋口門址」と記されている



アップで見たところ



ここはその近くに所在する八幡神社





拝殿



八幡町の八幡宮

元村社であつた当社は、古河公方足利政氏の命によつて、今を去る四百九十二年程前の、大永元年（千五百二十一年）というに、鎌倉鶴岡八幡を勧請して古河城第三の郭に祀り、田畠十五石を社料として寄付されあつたと云うが、其後百二十二年にあたる寛永十九年（千六百四十二年）と云うに、時の城主土井大炊頭利勝によつて、城外鬼門に当る地を檢べて、今の地に遷されたものである。

平成二十五年一月

〔古河史跡と古河藩のおもかげ〕より抜粋）

正面中央が本殿



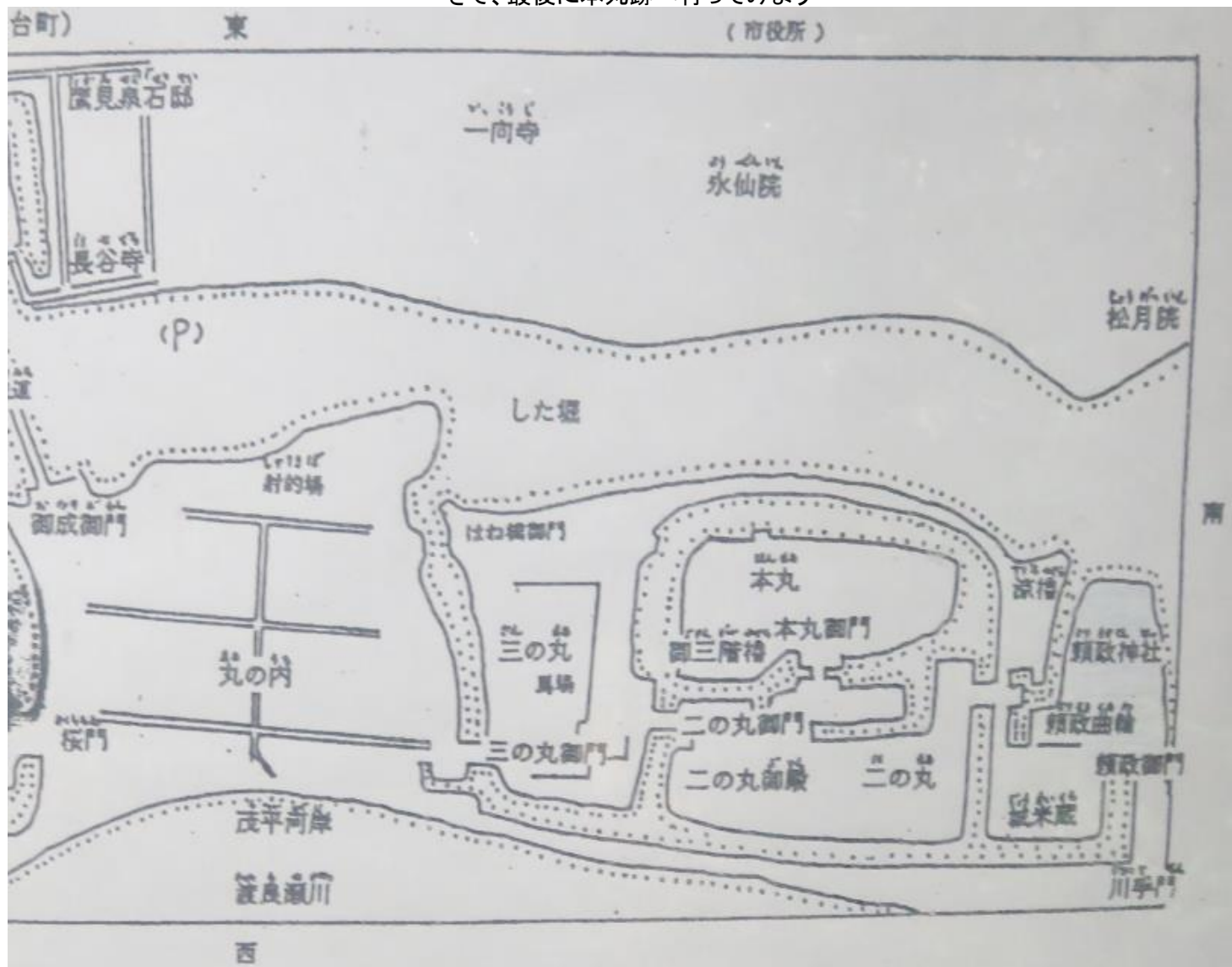
さて、ここは古河歴史博物館の隣に所在する鷹見泉石記念館/江戸時代中期から後期の古河藩家老・鷹見泉石の晩年の住まいを改修したものと云う/鷹見泉石は「大塩平八郎の乱」の鎮圧にあたった人物



こな塩梅



さて、最後に本丸跡へ行ってみよう



明治末に開始された渡良瀬川改修事業により、河川敷となってしまったと云う本丸跡の堤防上には石碑があった



説明板もある





跡丸本城古河



古河市教育委員会

城の西を流れる渡良瀬川を自然の堀とし、城内に船着場を設けるほか、北側には民間の河岸問屋が営まれ河川交通の要地となっている/ただし、城は城下の最も低いところに位置しているため、度々洪水の被害を受けているようだ/東も百間堀と呼ばれる低地を利用した堀を構え、全体に自然地形をうまく利用した縄張りとなっている/更に、東の台地を日光街道が開通し、宿場としての機能も整えていたと云う



古河公方足利成氏が康正元年(1455)に古河へ移座し、古河城は整備・拡張されていった。その一応の完成をみたのは、土井利勝が本丸に御三階櫓を造営した寛永12年(1635)のことである。城郭の規模は南北1800メートル、東西650メートルほどであった。

本丸には御三階櫓・菱櫓・巽櫓・弓櫓・御殿があったが、本丸御殿は江戸中期に取り壊されている。

明治7年(1874)、その威容をほこった古河城は、その前年に発効された廃城令によって取り壊され、建物や門、石垣にいたるまで払い下げられた。そして、明治43年にはじまる渡良瀬川河川改修工事によって、立崎郭・頼政郭・二ノ丸・本丸・東帯郭・西帯郭・三ノ丸を失うこととなった。

本丸や二ノ丸等の主要部分は、渡良瀬川に架かる三国橋と新三国橋にはさまれた堤防・河川敷に相当し、この方向には立崎郭(左手)・頼政郭(右手)があったようだ



その右手は本丸(左手)・三ノ丸(左手)の跡



更にその右手は丸ノ内(左手)・観音寺郭(右手)



その右手、堤防を挟んでこちらは諏訪郭方向



その右下は東帯郭/その先は百間堀(した堀)のエリアで、左手の湿地はその雰囀気を留めているようだ



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/008ibaraki/079koga/koga.html>

<http://otakeya.in.coocan.jp/info02/kogaj.htm>

<https://rekijin.com/?p=15158>

<http://blog.aoplanning.com/general-ground-castle-koga/>

<https://ameblo.jp/castle-manabu/entry-11516177879.html>

<http://www.kit.hi-ho.ne.jp/nagae/koga.html>

<http://www.takakurashoten.sakura.ne.jp/castle/kantou/kogaiyo.htm>

<https://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/koga.htm>

<http://kmimu.html.xdomain.jp/castle/kanto/koga.html>

